
陸軍十無双～帝国陸軍兵士と恋姫たち～

マリアナ諸島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸軍十無双〜帝国陸軍兵士と恋姫たち〜

【Nコード】

N7286X

【作者名】

マリアナ諸島

【あらすじ】

1944年、太平洋戦争の中国大陸。膠着した中国戦線を有利にし航空基地破壊のため大陸打通作戦を下令。

そして、洛陽に向かう野砲小隊にいる一人の兵士が外史に…

オリジナルストーリーが含まれています。基本的にキャラは死な

ないように努力します。

完全に誰得小説です。もし良かったら感想待ってます。

プロローグ（前書き）

初めての小説なので、駄文ですがよろしくお願ひします。

プロローグ

1944年中国大陸

「急げ急げ！！早くしねえと洛陽攻略に間に合わんぞ！！」
部下を叱咤しながら野砲をトラックに牽引させる。ある者は弾薬をトラックの荷台に載せある者は小銃を持ち辺りを警戒していた。

中国大陸全土で展開される大陸打通作戦、正式名＜一号作戦＞のため、俺の部隊は移動の準備をしていた。

「班長！準備が出来ました！いつでも出発できます！！」

「よし！総員乗車！」

と言い、トラックに乗り込んだ瞬間、後方で爆発が起きた。

「何事だ！」

「敵の攻撃です！迫撃砲と機関銃を持っております！！」

「砲は！？」

「最初の攻撃で破壊されました！」

「とにかく応戦しろ！」

トラックの影に隠れながら応戦するが敵の方が数が多い上に機関銃などの火力に差があり、一人また一人とやられていった。

「迫撃砲と機関銃を潰せ！手榴弾を使うんだ！」

俺はそう叫びながら小銃に弾をこめ、構えた。その瞬間、目の前を横切る砲弾が目が捉えた。

そうして…一発の迫撃砲弾が弾薬箱に命中した。

「総員たっ…！！」

一瞬、思い出さくはない思い出が走馬灯として駆け巡り、目の前が真っ白になった。

弾薬箱の爆発によりほとんど兵士が死傷。生き残りも果敢に反撃したことによりこの野砲小隊は洛陽にたどり着く前に全滅した。

しかし、宿命か、はたまた悪魔の悪戯か。一人の帝国陸軍兵士が外史へと続く道を行ってしまったのは誰も知らない。

プロローグ（後書き）

なんとも中途半端に、ごめんなさい。これから精進します。

第一話（前書き）

遅くなつてすみません!!

第一話

…

…うーん…うっ…

「あれ?…」

「ここは?確か村のはずれにある雑木林の陰で敵の攻撃を受けて…」

「なんで、荒野のど真ん中?その前に俺は死んだはず…」

「待てよ待てよ、俺の名前は木口哲郎。年は20、階級は軍曹、洛陽攻略に間に合うように出発しようとして敵に不意討ちを喰らって…」

「…駄目だ、それ以上思い出せん…」

「なんで敵の砲撃で死んだはずなのに見渡す限りほとんど何も無い荒野に…いるんだ?」

「はあ、仕方ない。とりあえず何かないかな?」

「辺りを見ると、手元にはさっきまで持ってた小銃。見たところ問題はない。」

「他には何かあったかな?」

「探した結果、観測用の双眼鏡、銃剣、拳銃、その辺に転がってた小銃と拳銃の弾。」

「手榴弾は使いきっていた。」

「しまった、食料がない…」

「ほとんどの荷物をトラックに載せてたから武器ぐらいしかなかった。幸い水筒と隠し持っていた菓子とかなんやらがあった。」

「さて、これからどうするか…」

「本当だったら洛陽に行かねばならないが、ここがどこだかわからないし…」

「俺の部隊は…?」

敵の攻撃で全滅したなら死体や残骸があるはず、何より…

「トラックの跡が…ない…?」

というより道らしい道がない…

「やはりここはあの村はずれじゃない…?」
ならどこだ?

「考えても始まらないな」

こういつ時こそ前向きに考えよう!

……

断じて現実逃避ではない!!

とりあえず、装備をもう一度確かめて、小銃に銃剣を装着し、担いだ。

さて、どっちへ行くこうか?

「まあ、どうにかなるだろ」

……

1時間後

「ここ、どこだ…」

駄目だ、全然場所がわからん。

「どうする…」

そう呟いた時、ふと遠くで土煙が上がっていた。すかさず双眼鏡を構える。もしかしたら、移動中の味方かもしれない。

「味方でありますように…」

祈りながら双眼鏡を覗く。敵だった場合、結構シャレにならない。しかし、人影は見えるが土煙で見えない。

「うーん、何をやってるんだ?」

移動しているようには見えない。

「戦闘、にも見えんなあ…」そもそも、こんな荒野のど真ん中で土

煙が上がるぐらいの乱戦つていつの時代だよ。

「もつと近くで見ると見えないな」

とりあえず、見つからないように近づこう……

「行けー！賊共を逃がすなー！」

「「応っ！」」

頼もしげに返事をし、賊を討ち果たしていく兵たちを見て安堵する。賊共も果敢に反撃するがきちんと訓練された兵士相手では勝ち目はない。周りには賊共の無惨な死体が転がっていた。

これでこの辺り一帯は大丈夫。次はすぐに北に行つて匈奴からの攻撃を防がなければ……その前にメンマで一杯飲もうかな……

出来るだけ姿が見えないようにしたおかげで気づかれていない。さて、敵か味方か……

「なんだ、見たことない騎兵部隊だな？しかも槍に剣？相手の歩兵は……八路軍じゃない。便衣兵みたいだが……」

どうやら騎兵部隊が追撃を始めたようだ。銃ではなく槍や剣を持つて。

少し様子を見ていたら騎兵部隊から離れ、騎馬が一騎立ち止まっていた。

「……………ん？」

見間違いだと思いい目をこすった。もう一度見る。

「うん、女の子だ…」

馬に跨がり、紅い二股の槍を持ち、騎兵の追撃を眺めるその少女はその年に似合わない、しかし風格のある顔つきをしていた。

「あの騎兵隊の指揮官か？しっかし…目のやり場に困る服だな…。つかなんで女？」

などといういる考えていたら、無数に転がる死体の一つが動いたように見えた。

「気のせいか…」

と思ったその時、

「死ねえ！！！」

その叫びを聞き、私ははっ、とした。そして、一瞬にして背中に衝撃、視界は青空を背景に醜い賊が剣を突き立てようとしてた。

（くっ！こんな奴にっ！）

私は必死に抵抗しようとした時、何かが破裂するような乾いた音と共に、賊が持っていた剣は弾かれた。賊は何が起こったかわからない顔をして自分の震える手を見つめていた。私はその隙に賊の体を突き刺していた。

剣を振りかぶり、少女の馬に一切り。その衝撃で少女は背中から叩きつけられた。

「くそっ！」

俺は銃を構える。距離は100mほど。部隊で一番射撃が上手かった俺には余裕の距離だった。照準を、男が持っている剣に合わせた。

パン、と一発の銃声。男の剣に命中し、綺麗に弾き飛ばした。槓悍を引き、薬莖を排出し、槓悍を戻し弾を装填する。男は何が起ったかわからず、ただ呆然と剣を持っていたはずの自分の手を見つめていた。その際に少女は男をあの紅い槍で一刺しした。とりあえず、近づいて話を聞くか…

「おい、大丈夫か？」

(そついやこの娘、中国人か?)

「うむ、なんとかな」

「お、そうか、そいつは良かった」

彼女は男をどけ、立ち上がり、俺のほう見る。
なかなか可愛い娘だ。

「先程、この賊を倒したのは貴殿かな？」

「ああ、その通りだが」

「ふむ、どこからですか？」

なんだ？何故そんなことを気にするんだ？しかも心底不思議な顔をしてるんだ？

「あそこからだか…」

「弓を使わずに？」

「どこにあるんだ？そんな時代遅れなもの」

この娘、銃を知らないくらいド田舎に住んでんのか？

「その槍を使つてか？」

と、銃を指差す。

まあ、銃剣着けてりや槍に見えなくもないが…

「ああ、そうだ」

また不思議そうな顔をして黙り込んだ。

おっと、俺も聞きたいことがあつたんだ。

変な奴だ。

これに尽きる。あんな遠距離から、しかも弓ではなく槍を使うとは…。妖術使い…には見えん。格好も緑と茶色混ぜたようななんとも
言えない色、見たことのない兜…

「すまんが聞きたいことがある」

「なんですか？」

「ここはどこだ？」

放浪者か？にしては軽装すぎる気が…

「ここは幽州と青州の境界に近いところですが…」

何故顔がひきつってるんだ？

幽州に青州！？なんで三国志時代の地名が出てくるんだ！？

落ち着け俺。何かの間違いだ。あの時の砲撃で頭かなんか打ったんだ。

「あ、あはは、そうでしたか、あは、あはは」

「おっと、そういえば」

「ど、どうしました？」

「助けて頂いたのに自己紹介もしていませんでしたな」

おお、そうだったそうだった。すっかり忘れてた。

「先程は本当にありがとうございます。私は姓は趙、名は雲、字は子龍と申す。

」

第一話（後書き）

とりあえず、ハムさんところに行きます。何かしらご希望がある方は感想もしくはメールにてお願いします。

主人公紹介

マリアナ（以下マ）「さあ！楽しい楽しい主人公紹介のお時間がや
つてまいりました！作者のマリアナです！」

木口（以下木）「主人公の木口哲郎です」

マ木「「よろしくお願いします！！」」

木「おい作者」

マ「おう、どうかした」

木「これはどうゆうことだ？」

マ「えっ？どうゆうことって？」

木「本編はどう「それじゃ主人公紹介いきまーす！！」し、つてお
い！ー！」

マ「主人公、木口哲郎は大日本帝国陸軍支那派遣軍所属の砲兵で、
恋姫世界に飛ばされる前は1944年に行った大陸打通作戦に参戦
する予定で、北京から洛陽に移動する最中、敵の奇襲を受け部隊は
全滅、そして一話目へと突入するわけなんです」

木「プロローグ分かりにくいんだよ。しかも大陸打通作戦なんてマ
ニアックなもん出すな！」

マ「仕方ないだろ！出したかったんだもん！」

木「文才が皆無なくせに調子乗ってんじゃねえよ！」

マ「反省してるけど後悔はしてない！」

木「駄目だこいつなんとかしないと……」

マ「ちなみに、元は大学生でしたが召集がかかり、しびしび陸軍へ行きました。大学時代は文学部歴史専攻科で、戦術や戦略の研究してました。ぶつちやけ二十歳で軍曹なのは、努力と運と彼なりの戦術だったりで昇進したものです。」

木「まあ、それだけじゃないかな……」

マ「木口君は過去にちょっといろいろありまして、それが少しトラウマになったりしてます。まあ、その辺は本編で」

木「きちんと更新しないと展開しないけどな」

マ「……まあ、頑張ります……」

木「なんでそんな自信無さげなんだよ！！まあ、大方最近始めたオンライン艦隊戦ゲームにハマってそっちに気いとられてんだろ」

マ「ギクツ！いやいや、部活も忙しいんだよ！！」

木「まったく、そんなんじゃ、せつかく読んで頂いてる読者様に失礼だろ」

マ「うう、確かに……。せつかく感想も頂いたし……。とりあえず、感想書いて下さった明日柿様、かなや様ありがとうございます！また、最後まで読んで下さった方、チラッとでも見て下さった方、本当にありがとうございます！最後までお付き合いして頂ければ幸いです。」

木「主人公紹介と言いつつ全然紹介されてないぞ俺」

マ「……………木口君のこれからの活躍していけばいつかわかるだろう」（遠い目）

木「適当過ぎたる!!！」

マ「それでは皆さん！これからもよろしくお願いします!!！」

木「こんなグダグダでごめんなさい!!！」

第二話（前書き）

前回からだいぶ時間をかけて申し訳ありません！！今後も頑張りますので、応援よろしくお願いいたします。

第二話

夢だと思った。

きつと砲撃で気絶して眠ってしまったんだ。

そう思い自分の頬をつねる。

痛い。

「何をやっているのですかな？」

趙雲と名乗った少女が怪訝な顔をして聞いてきた。

「いや…」

俺は信じられなかった。

目の前にいる少女がかの有名な趙雲子龍で、今しがた撃退したのが黄巾党だと言う。

止めに今の王朝を尋ねれば漢王朝だと…

つまり俺は時代…いや、時空を越えて平行世界、異世界に来たと言っても過言ではない。

なんせ、あの趙雲が女の子なんだからな…

「そういえば、名はなんと申すのですかな？助けて頂いたお礼もしたいのだが」

声をかけられはっ、とする俺。

「どうしました？」

目の前にいる趙雲と名乗る少女がこちらを伺うように見つめている。何か見透かされそうな目だった。

「俺は木口、木口哲郎だ。木口が姓で哲郎が名前だ」

嘘をつかなかった。この格好なら偽名なんぞ無意味だしな。

「ほう、変わった名ですな」

物珍しそうな顔をした。しかし、詮索するような真似はしなかった。そこで、追撃に出ていた騎兵部隊が戻ってきたようだ。

「趙雲様！賊の残党を殲滅しました。味方に被害はありません」

隊長らしき、ものものしい兜をかぶった男が俺に一瞥した後、趙雲にそう報告した。

「よし、では城に戻ろう」

そう言った後、くるっとこちらを向き、

「先程、救って下さったお礼に城へ招待させていただく」

と、有無を言わさぬ不敵な笑みを浮かべそう言った。

とりあえず、城に連れてくる事ができた。何故連れてきたのか？

身なりはあまり綺麗とは言えない暗い緑と茶色が混ざった服。

見たことのない擦りきれた靴。

前頭部についた星以外何もなく、そこかしこに傷がついてる質素な兜。

はっきり言って怪しいと思わないのは無理に決まってる。

では何故そんな奴を連れてきたのか？理由は三つ。

一つ目はもちろん助太刀してもらった礼だ。

二つ目は其奴が持っていた得物だ。細い筒になっている鉄と若干曲がってる木でできた槍のような物だが、その筒から物凄い勢いで吐き出される物は私にも見る事ができなかった。

最後に三つ目、こやつは間違いなくこの世界の人ではない。このまま放置しとくのは危ないと思ったからだ。

「あの…趙雲様…」

城門に近づいた時、近くにいた騎馬隊の隊長が私を呼んだ。

「どうした？」

「あの男、どうします？」

「私の命の恩人だ、格好はアレだが丁重にもてなせ」

「はっ」

周りに聞こえないように短く話し、隊長はすぐに離れた。その後、木口は隊長に部屋へと案内されていった。

「こちらになります」

騎兵隊の隊長に部屋を案内されてきた。しかし、周りの視線が刺さってきたな…。入った部屋は小会議室のような部屋だった。円卓に4つの椅子が置いてある。

「どっぞおくつろぎ下さい」

と、言い部屋を出た。おそらく扉のそばで見張っているだろうけど。部屋自体にはなんの問題もないのでとりあえず椅子に座る。

しかし、困った。正直こんな所に連れてこられるとは思わなかった。そして、何より…

「俺は、もう戻れないのかな…」

趙雲から聞いた話と今まで見たこの城下町を合わせて考えて、行き着くのは俺がいた昭和19年ではなく、もつと昔、中国の後漢時代の末期。そして、これから始まるであろう群雄割拠の時代への序章。今がその時であった。

「まあ、アメ公の火の雨やら八路軍の便衣兵なんぞよりはましかなどと思っていたら、ドアが開き、趙雲ともう一人知らない女性が入ってきた。

「さて、まずはお前の素性を吐いてもらおうか」

と、赤髪を一つに纏めた極普通の女性が言った。俺は自分の未来を計算しつつ、話を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7286x/>

陸軍十無双～帝国陸軍兵士と恋姫たち～

2011年12月29日12時50分発行